

【実践報告】

教育実習Ⅴ・Ⅵ（中・高）の報告

広島文教大学教育学部教育学科

教授 笹原 豊 造

准教授 猪川 優 子

0 はじめに

教育実習Ⅴ・Ⅵは中学校教員および高等学校教員としての適性を確認し、その資質を伸張するために行われるものである。大学で学んだ理論と教育現場での実践がどのように関連するかを実習で学ぶ。実習校で実習校教師の指導のもとに、授業参観、教材研究、授業実施、学級指導などを行う。

本実習に参加するまでに、本学でのガイダンス、実習校との連絡など重要な手続きを忘れずに行わなくてはならない。

1 教育実習Ⅴの実際

- 実習前のガイダンス（2時間）
- 実習校での実習
- 1. 実習校でのオリエンテーション（2時間）
- 2. 授業参観（78時間）
- 3. 教材研究（20時間）
- 4. 授業担当（20時間　うち研究授業1時間）
- 5. その他校務担当
- 6. 事後学習　学内で報告会を実施

2 教育実習Ⅵの実際

- 実習前のガイダンス（2時間）
- 実習校での実習
- 1. 実習校でのオリエンテーション（2時間）
- 2. 授業参観（38時間）
- 3. 教材研究（20時間）
- 4. 授業担当（20時間　うち研究授業1時間）
- 5. その他校務担当
- 6. 事後学習　学内で報告会を実施

3 実習先概要

広島県	英語科	6校	国語科	8校	山口県	国語科	1校
島根県	英語科	1校	国語科	1校	愛媛県	英語科	2校
大分県			国語科	1校	熊本県	国語科	2校
長崎県			国語科	1校	沖縄県	国語科	2校
							計27校

4 学生の報告書より

I. 教育実習前に心がけたこと、あるいは準備事項

事前訪問で教材を教えて頂きました。私はコロナの関係で、実習が始まる三日前に高校で説明会が行われました。なので、教材研究や指導案の作成がとても大変だったので、予め、「学年とクラス」「教科書とその範囲」を聞いておくと思いいます。また、担当する生徒の授業の様子や、普段の生活の様子を知っておくと、授業も行いやすくなると思います。

高校の場合は「コミュニケーション英語」と「英語表現」の二科目をやる場合があります。なので、長文読解や教材研究だけでは足りないの、文法をもう一度おさらいしておくと思いいます。さらに、授業で扱っているワークシートを頂けることもあります。それを基に授業を進めている場合があります。なので、授業の展開を聞いておくことも必要だと思いいます。

II. 校務について

私が担当したクラスは比較的落ち着いているクラスで、人見知りをしてしまう生徒が多かったので、空き時間で、積極的に関わるようにしました。最初の週は後ろで観察をしている事が多いと思いいます。なので、机間巡視をする時に話しかけたり、ノートを見せてもらったりすると思いいます。

LHRで私が受験についての話をしたプリントにコメントを書かせて頂きました。しっかりメモを取っていて、なかには質問を書いてくれた生徒もいましたので、終礼で答えたり、空き時間や掃除時間で個人的に話をして、生徒とコミュニケーションをとる機会を作りました。

質問をきっかけに相談されたりすることがあります。学年によっては、進路や受験勉強の仕方を聞かれると思いいます。なので、自分自身が受けた方法やどうやって大学を選んだのかなど、思い出しておくに立つと思いいます。

III. 授業について

「コミュニケーション英語」「英語表現」どちらも授業は日本語で行いました。

私は、進学をする子達が多い「選抜クラス」を担当させて頂きました。そのため、コミュニケーション英語では、ただ内容を理解する、使われている文法が何かを説明するだけでは時間が余ってしまうので、受験で必要な文章の読み方を説明しながらの授業が中心でした。

コミュニケーション英語を指導する際に、注意しておかなければならないのは「文型」「文法」「読み方」の3つです。正直、文法だけ分かっていたとしても解説をするには、時間が余ってしまいます。ですが使われている全ての文法を解説すると、時間が足りません。45分もしくは50分で「何を教えたいのか」「どこがポイントなのか」を抑えた上で、指導案を作成しないといけません。指導書だけでは補えないような事もあります。なので、指導教諭の先生と協力して何を伝えたいのかを一緒に考えることも1つの方法です。

IV. 後輩に伝えたいこと

最初の一週間で、指導教諭がどのように授業を進めているのかを観察しておくことが、2週目から自身が授業をする上で大事になってきます。全部をまねするという訳ではありませんが、どのように進めたら、生徒達が食いついてくれるのかが分かるようになります。さらに、生徒の中には、予想にもしていなかった質問が授業の中で飛び交うことがあります。そこで焦ってしまうといけないので、「この質問が来るかもしれない」と自分で予想して対応出来るようにしておく方が良いと思います。

V. 実習を終えて

生徒一人一人と関わるには、あっという間の3週間でした。最初は緊張してしまうかもしれませんが、部活動の事を聞いたり、授業が終わった後にノートを見せてもらったりして、生徒と話すきっかけを作ったので、仲を深める事が出来ました。

毎日失敗して、反省するばかりの日々でした。一番感じたのは、「知識不足」「準備不足」だった事です。準備をすればするほど、大丈夫だろうと思っていましたが、そんなことはありませんでした。準備をしても「足りない」と感じてしまいます。大学で学んだ事がここで響くなど改めて実感しました。文法だけではとてもではないですが、実習は乗り越えられない事に気づかされました。分からない事だらけで、教壇に立つのも怖いと感じたこともありました。

ですが、生徒の言葉や、指導教諭や同じ科目の先生方にたくさんアドバイスを頂いたおかげで「頑張ろう」と思う事が出来ました。教壇に立つ怖さを無くす事が出来るように、残りの大学生活で貪欲に知識を増やして、現場で堂々と授業が出来るように、この3週間で得たことを、今後に生かしていきたいと思います。

5 成果と課題

教育学部が設立されて4年が経過し、完成年度を迎えた。感染症の影響でオンライン授業を余儀なくされるなど困難な状況下ではあった。本実習は幸いなことに、すべて希望する実習先で実習を体験することができた。学生たちの報告書には、実習で得た生徒たちとの触れ合い、指導教諭からの励ましへの感謝など、今後の成長に期待できる前向きな感想が記されている。

しかし、採用試験の結果は決して満足できるものではなかった。これまでの4年間の指導体制を見直し、反省すべき点は反省し、より一層の努力を重ねる必要がある。